

激動 の経営

芸術作品

「私にとって会社経営とは、終わりのない芸術作品の制作」――。吉田博は、1985年に36歳で富士電工の社長になり、今日まで経営に携わってきた。絵画に例えれば、会社と

富士電工

④

いうキャンパスにさまざまな色を持つ個性豊かな社員と共に絵を描く楽しい動作。「予期できない展開に驚き、感激することもある」と話す博は、ずっとわくわくしている。

次のわくわくの一つは、同社が扱う電線の需要が高まる電気自動車（EV）だ。米ラス

変化を楽しむ



になる。業界規模は自動車の方が大きいため、いつかは飲み込まれるのでは、との懸念が博の頭をよぎったが「仮に飲まれたとしても、一緒にあって伸びれば残る」と前向きに捉え直した。空飛ぶ車など昔は想像もつかなかった技術の実現に

「どんどん楽しみが出てきちゃった」と博は目を輝かせる。

変化を楽しむ強さの原点は、高校と大学時代に経験した2人乗りヨットにある。だっ広い海の上。ヨットの進行に影響する風向きや潮の流れは時々刻々と変化していく。しかし、それは目に見えない。「変化を変化と思わなくなり、暗がりを進むことへの恐怖心が消えた」という。

色彩豊かに

その姿勢は、経営の決断にも現れている。

10年後には多様な人が働く職場に（東京・港区芝大門、本社オフィス）

わくわくは終わらない

86年に同社初の海外進出を果たし、顧客の要望で電線問屋ながら加工まで手がけ、経営の柱に育てた。博は「海外進出でキャンパスは100倍にも広がり、社員が持つ色はほぼ無限に増えた」と話す。

多様性の大切さは米国での留学経験で身にしみて感じた。さまざまな国から学生が集う教室では、日本人にはない発想も多く飛び交った。今後は、富士電工の社内公用語を英語にする方針だ。また、現在国内で3割ほどの女性比率を引き上げたい。博は米国や東南アジアの国々では、電線業界に女性の営業職が

5割以上いると見る。「10年後には多様な人が働く職場になるだろう」と期待を込める。

「地味な分野かもしれないが、電線はこれから先もどこかにつながつていく。思いを込め『CONNECT』というスローガンを設定した」。加工工場があるマレーシアとインドネシアに、商社機能を持つシンガポールと中国。そして東京本社と関西・山形支店など、博と総勢60人の従業員が描く絵は、どのようにならぬのか。

（敬称略）
この項おわり。熊川京花が担当しました